

展示品一覧

○ 大図（長野県上田市～新潟県妙高市）

「越後街道図第五〈自上田／至関山〉」

国宝：地図・絵図類 番号58、縮尺36,000分の1、文化元年上呈図の伊能家副本。

大図の隅に「自上田 北五尺四寸四分二厘 至関山 西二寸五分九厘八毛」と墨書され、測線の末端同士の
大図上の位置関係が記録されている。

この大図は享和2年10月7日に関山宿を出立して、北国街道（善光寺街道）を進み、同月12日に上田城下の海野町に到着するまでの測量の成果である。

8日から宿泊した善光寺大門町の藤屋平左衛門の様子について、江戸の町絵師長谷川雪旦が『北国一覽写』に活写している。食事風景や大きな風呂桶が並んだ浴室など興味深い。長谷川雪旦は『江戸名所図会』の挿絵で有名であるが、天保2年（1831）に出羽、越後、信濃、上野を旅した際に『北国一覽写』を描いた。忠敬は結果としてこの藤屋平左衛門に3泊することになった。

9日の測量日記には「此朝、善光寺に参詣す」とあり、その後、泊触を出したところ、「犀川大水に付、川留」との返事があった断念。其の夜には測量ルートを変更し東の千曲川を渡って松代城下を通行する先触と泊触を出した。ところが千曲川も大水で川止めとの連絡があり、10日も逗留となった。11日「犀川の渡 明通達を待」ってようやく出立することができた。

ところで展示中の伊能家副本には藤屋平左衛門の所在地の「大門町」が天測の合印★の下に記載されているが、写本である国会図書館の大日本沿海輿地全図やアメリカ議会図書館の大図には記載されていない。



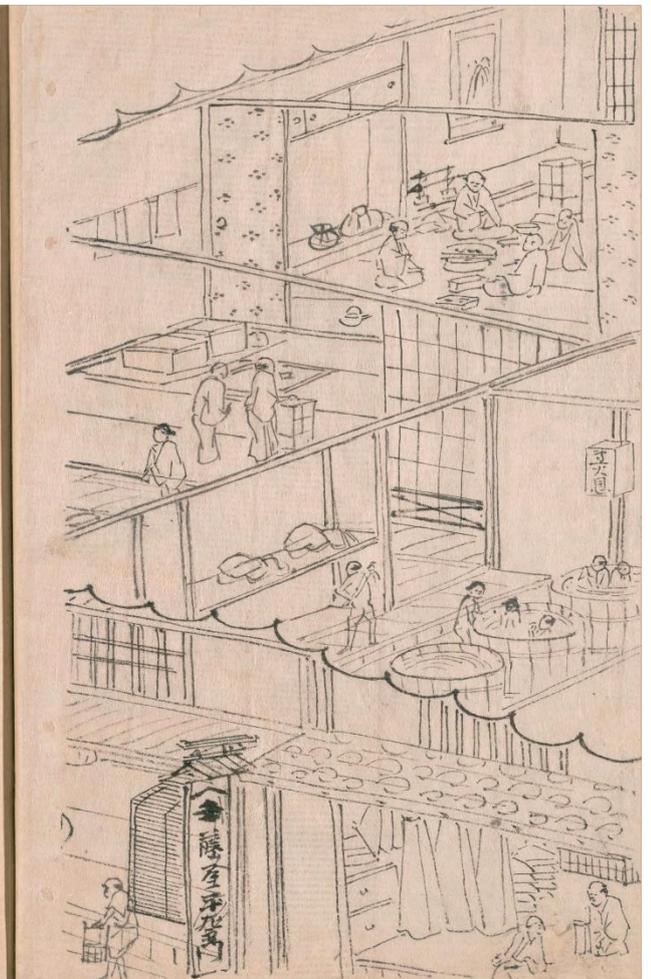
『大日本沿海輿地全図』第81図

国会図書館デジタルコレクション



長谷川雪旦 『北国一覽写』から藤屋平左衛門

国会図書館デジタルコレクション



○ 大図（長野県上越市～新潟県柏崎市・妙高市）

「自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図第十七（自今町／至柏崎／又越後街道／至関山）」

国宝：地図・絵図類 番号33、縮尺36,000分の1、文化元年上呈図の伊能家副本。

「自今町 北一尺九寸三分二厘 至柏崎 東二尺四寸〇〇六毛
自今町 南二尺五寸五分三厘 至関山 西 二寸〇七厘」と墨書されている。

この大図は2つの区間からなる。

- ・第三次測量で出羽、越後の海岸を南下し、享和2年10月2日に柏崎を出立して、4日に直江津の今町で休憩するまでの海岸沿いの区間。
- ・今町から内陸に向かい北国街道（善光寺街道）を進み、高田城下で2泊したのち、関川の関所を越えて10月6日に信州の関山に到着するまでの区間。

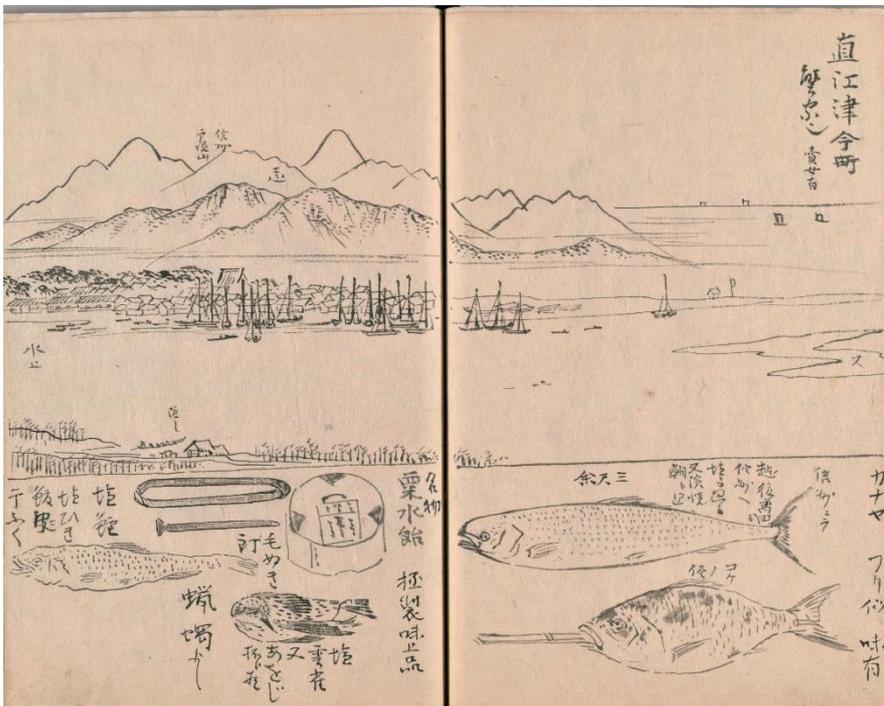
なお、第四次測量で加賀、能登、越中から東進し、享和3年8月13日に今町を出立してから、17日に柏崎に到着するまでについては、「是より出雲崎まで、去戊年（享和2年）測量相済しゆえ、道路測量なし」と測量日記に記されている。

右の大図の今町（直江津）は刈谷田川河口に位置し、交通の要所として繁栄していた。『北国一覽写』の「直江津今町」には港町の風景と、この地の名物が描かれている。

展示中の伊能家副本は砂浜の黄色と断崖の緑色のコントラストが鮮やかである。伊能家副本には高田城下での宿泊先本陣三国屋八郎右衛門の所在地の「呉服町」が天測の合印☆の下に記載されているが、大日本沿海輿地全図やアメリカ大図では省略されている。



『大日本沿海輿地全図』第80図
国会図書館デジタルコレクション



長谷川雪旦 『北国一覽写』から直江津今町
国会図書館デジタルコレクション

○ 大図（新潟県糸魚川～直江津）

「自江戸歴尾州赴北国到奥州沿海図第十六〈自哥ノ至今町〉」

国宝：地図・絵図類 番号32、縮尺36,000分の1、文化元年上呈図の伊能家副本。

大図の隅に「自哥 北一尺八寸八分一厘 至今町 東四尺二寸二分七厘」と墨書されている。第四次測量で加賀・能登・越中測量を終えて越後に入り、享和3年8月9日に哥村出立して姫川を渡り、12日に直江津の今町で前年の第三次測量の測線に繋ぐまでの測量成果である。

糸魚川事件自体はあまりに有名であるので説明を省略する。糸魚川藩は越前松平家の支流で、一万石の小大名であった。江戸定府ということで藩主は上赤坂溜池之上の上屋敷にあって、領地の糸魚川に帰ることはなかった。武鑑によると糸魚川事件当時の藩主松平日向守直紹は大坂御定番であり、それまでも半蔵御門番などを歴任していたため出費が多く財政難に苦しんでいた。領地である糸魚川には陣屋が置かれ郡代が領内を治めた。鶴岡実枝子の「近世後期における一万石大名領陣屋町の経済的機能—越後国糸魚川町の場合—」（史料館研究紀要1）によると、陣屋には郡代以下の士分格は9名しかおらず、手代・足軽16人、仲間10人という陣容であった。また、角川日本地名大辞典によると、藩の財政逼迫に対し御用金・先納金などを頻繁に割り当て、糸魚川事件の16年後の文政2年には郡代黒川九郎治と町年寄が結託し、1万両近くを領内に割り当てたことから、数千の百姓が糸魚川陣屋に押し寄せるといふ黒川騒動が起こった。

糸魚川事件の背景として、糸魚川藩の体制の問題、つまり、弱体な糸魚川の陣屋と藩主が大坂在番で不在中の江戸藩邸という問題も考えられるのではないだろうか。



国会図書館デジタルコレクション
『大日本沿海輿地全図』第80図

○ 下図（神奈川県江ノ島）

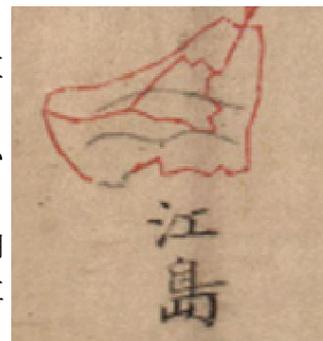
「相模国鎌倉郡江の島下図」

国宝：地図・絵図類 番号175、縮尺36,000分の1、法量44.1×27.6cm

江ノ島だけを描いた小区域下図で、島の外周の測線は黒色、内部の測線は朱色、方位線も朱色である。

「山島方位記」によると、江ノ島西端の児ヶ淵（稚児ヶ淵）から富士山、大山、大島、天城山などの方位を半円方位盤で計測している。また江ノ島の下図上の距離が「南北直三分 東西五分六厘余」と朱書きされている。

江ノ島測量は第二次測量の享和元年4月21日と22日である。21日に由比ヶ浜から鶴岡八幡宮までは「脚間を以測量」し、それからは測量せず鶴岡八幡宮から建長寺、円覚寺、大仏を参詣した。この日は腰越村で宿泊と泊触を出してあったが、江ノ島は潮が引いていて徒歩で渡る事ができるということで、江ノ島止宿に変更した。この日は江ノ島の岩屋まで測量し、翌22日に残りを測量して三弁天に参詣した。



アメリカ大図93号

○ 下図（神奈川県）

「自相模国鎌倉郡片瀬村至相模国大住郡須賀村下図」

国宝：地図・絵図類 番号175、縮尺36,000分の1、法量32.4×45.6cm

江ノ島測量の続きで、享和元年4月22日に江ノ島の付根の片瀬村、鵜沼村、茅ヶ崎村南郷までの海岸線測量、23日の馬入川（相模川の河口部の別称）までの測量の成果である。

測線は黒色で、「片瀬村 大久保山城守」「茅ヶ崎 御料」と村名・領主名を朱書している。この下図は全体に虫損がひどい状態である。



○ 参考絵図（天草諸島の牛深村・久玉村・深海村）

「肥後国天草郡牛深村参考絵図」 国宝：地図・絵図類 番号756

「肥後国天草郡久玉村参考絵図」 国宝：地図・絵図類 番号757

「肥後国天草郡深海村参考絵図」 国宝：地図・絵図類 番号758

第七次測量の薩摩測量を終え伊能測量隊は、文化7年9月18日に天草諸島の下島に渡った。23日には深海村、24日には久玉村、25日には牛深村に宿泊した。

この3枚の参考絵図はともに、道路、村、田畑、水、堤などの色分けの凡例もなければ作製責任者である村役人の名前も記されていない点で異例である。また3枚とも同じサイズの用紙で、色使い等記載の仕方も共通している。3ヶ村がそれぞれの責任で別個に作製したというよりも、統一的に作製し提出したのではないだろうか。この頃の天草は、天領ではあるが島原藩の預かりとなっていたが、どこが主導して統一的な村絵図を作成したのであるだろうか。見たところ、よくある村絵図のようではあるが、不明な点が多い。伊能忠敬記念館には他に23枚の天草の参考絵図があるので比較してみたいところである。

○ 第三次測量関係文書2通（高橋至時から伊能忠敬へ）

「陸奥三馬屋以西東海測量申渡」 国宝：文書・記録類 番号269 享和2年6月3日付

「測量心得申渡」 国宝：文書・記録類 番号270 享和2年6月

高橋至時から伊能忠敬あてた第三次測量の辞令と、同じく第三次測量に関する高橋至時からの測量御用心得である。両者ともに第三次測量の「測量日記」の冒頭にも記載されている。

測量辞令には「陸奥三馬屋より西之方北海通、出羽、越後、越中、能登、加賀、越前までの海辺、それより陸地通、南之方尾張へ出、尾張、三河、遠江、駿河之間、海辺致測量」とあり、また「尾張、越前より東之方諸国全体海辺地図」の作製が命じられている。このようにこの辞令は第3次測量と第4次測量の2回分を合わせたのものである。そのため、測量日記に記載された勘定奉行による先触は、千住宿から三馬屋まで、三馬屋から高田まで、高田から善光寺を通り板橋宿までの3通からなっており、第4次測量分は当初から含まれていない。

測量辞令の冒頭に「陸奥三馬屋より西之方北海通」とあるが、佐久間氏の測量日記も解説決定版の測量日記も「北海道」と誤読しているので注意されたい。なお大谷亮吉は「北海通」の北海にキタウミとルビを振っている。「北海道」の命名者は松浦武四郎であって伊能忠敬ではない。